

体験型海外教育実地研究 第6学年 異文化理解

「What is “MOTTAINAI”？」

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 加納 大地

1 はじめに

私がこの体験型海外教育実地研究への参加を決めたのは、本研修は「人生でおそらく二度とできないであろう経験ができる唯一のチャンス」であるという思いからであった。4月の説明会において本研修について知り、そのような思いを抱くに至った。何よりも、アメリカの学校で授業を行うというのは、本研修でしかできないであろう貴重な経験であり、その経験は私自身の人生においてとても大きな財産となるのではないかと感じられた。また、日本を離れて異文化の中に身を置くことによって、教育面のみならず多くの面において自分自身の中での変容もあるのではないかという期待もあった。このような思いから、私は本研修への参加を決めた。

2 実地研究の日程と概要

月日	曜	交通等	訪問地・用務等	宿泊地
4/24	水	渡航までの日程、パスポート、ESTA、授業研究テーマ事例、部屋割り		
5/15	水	授業研究テーマ案の交流、テーマの設定		
6/6	木	学習指導案の検討		
6/11	火	学習指導案の検討		
6/24	月	学習指導案（英語版）の検討		
7/1	月	学習指導案（英語版）の検討		
7/6	土	第9回学校間交流国際フォーラム		
7/7	日	ワークショップ：学習指導案および教材・教具の検討		
7/22	月	保険説明（学習指導案の検討、指導案の提出について）		
7/23	火	保険説明（学習指導案の検討、指導案の提出について）		
8/26	月	準備状況確認、報告書・教材集・発表会について、渡航準備・関係書類提出		
9/9	月	最終事前打ち合わせ		
9/14	土	広島—成田 07:55-09:35(NH3236) 成田—Washington Dulles 11:05-10:40(NH002) Washington Dulles—Raleigh 12:20-13:29(UA4880) 空港→ホテル（ウォーレン先生・ECUバス）		Greenville City Hotel & Bistro 203W.Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 Tel:877-271-2616
9/15	日	（ウォーレン先生・バス）	ミーティング、ホテルにて教材作り 各学校の先生方と事前打ち合わせ レセプションパーティ	Greenville 同上
9/16	月	City Hotel → C.M. Eppes （ウォーレン先生・バ	学校訪問(C.M. Eppes) ・授業実践 ・校内見学、授業見学	Greenville 同上

		ス)	ECU 訪問 ・図書館、リソースセンター見学 ・夕食会	
9/17	火	City Hotel → C.M. Eppes (ウォーレン先生・バス)	学校訪問(C.M.Eppes) ・校内見学、授業見学 ・生徒からのインタビュー ECU フットボールスタジアムにて 夕食会	Greenville 同上
9/18	水	City Hotel→ECU (ウォーレン先生・ECUバス) ECU→Raleigh (ECUバス)	午前：ECU の講義に参加 午後：Raleigh へ移動 自然史博物館・州議事堂を見学、市内散策	Raleigh Clarion State Capital 320 Hillsborough St, Raleigh, NC Tel:919-832-0501 Fax:919-833-1631
9/19	木	徒歩で、Exploris M.S.へ	学校訪問(Exploris M.S.) 午後：Raleigh 市内見学 歴史博物館見学	Raleigh 同上
9/20	金	Raleigh → Washington Dulles 10:21-11:34(UA4887) (空港－ホテル間はタクシー)	Washington へ移動 アメリカ文化体験	Washington DC Washington Plaza 10 Thomas Circle, N.W., Washington, DC 20005-4176 Tel:202-842-1300 800-424-1140 Fax:202-371-9602
9/21	土	徒歩	アメリカ文化体験 スミソニアン博物館見学	Washington DC 同上
9/22	日	ホテル→空港		
9/23	月	Washington Dulles→成田 12:20-15:25(NH001) 成田→広島 17:40-19:15(NH3237)		

3 実地研究授業

3.1 単元名 第6学年 「What is “MOTTAINAI” ?」

3.2 事前準備

①単元設定の理由

本単元を設定するにあたり、「日本人だからこそ伝えられる内容」「アメリカの子供たちが自らの生活にフィードバックできる内容」という2点を出発点とした。そこで、日本人が持っている「もったいない」という考え方を取り上げることとした。「もったいない」という言葉自体は日本特有のものであるが、その言葉が含意するのは「ものを大切にすること」、「ものやそれを作った人に感謝すること」といった気持ちであり、それは日本人に限らず、どのような文化圏の人にとっても普遍的であり得るものではないかと思う。この「もったいない」が意味する内容をアメリカの子供たちに伝えることができれば、日本文化の一端を理解するとともに、自らの生活を見直してみるきっかけになるのではないかと思い、本単元を設定した。

②準備したこと

言葉で伝えるだけでは理解が難しいと思い、「もったいない」という感情に結びつく状況を描いたイラストを準備した。実際の授業では、このイラストを通じて「もったいない」に結びつく感情を生徒に想起させる活動を行った。

また、授業時間や教室の状況などに対応できるよう、板書する予定の内容をあらかじめ画用紙に書いたものを準備し、生徒が行う活動で用いるカラーペンを、想定される人数に十分なだけ持参した。

3.3 学習指導案

Lesson Title: What is “Mottainai”?

Lesson Author: Daichi Kano

Date: September 16th, 2013

Grade I would like to teach: 6th grade

Subject: Culture

Description: In this class, students will learn about Japanese “Mottainai” culture. From this word, students will learn Japanese way of thinking, and reflect on their own daily life.

Objectives: As the result of this activity, students will be able to

1. Understand the meaning of “Mottainai”.
2. Reflect on their own daily life and find several Mottainai matters.
3. Think out what should we do at the Mottainai situations.

Procedure:

Activity	Teacher's activity	Materials
1. Learn about Furoshiki. (How to use it. The reason why it is used in Japan.)	1. Show children how to use Furoshiki, and explain why it is used in Japan. Through that, tell children there is the thought that is called “Mottainai” in Japan.	Furoshiki
2. Learn about the feelings of	2. Show children some pictures that	Pictures

<p>Mottainai through some situations that is associated with those feelings.</p>	<p>is associated with the feelings of Mottainai. And ask children “how do you feel if you are in this situation?”</p> <p>After that, tell children that “Mottainai” imply wide range of feelings. And explain the meaning of Mottainai.</p>	
<p>3. Recall their daily life, and find Mottainai scenes in their daily life. And draw the Mottainai scene and “My declaration of Mottainai” on a worksheet.</p> <p>4. Introduce “My declaration of Mottainai” to the classmates.</p>	<p>3.Let children recall their daily life, and ask them “When do you fell Mottainai in your daily life?” “If you feel Mottainai in that situation, What should you do then?”</p> <p>And let children draw the Mottainai scene and “My declaration of Mottainai”(When I feel Mottainai, I'll do...) on a worksheet. (Show the sample made by teacher.)</p> <p>4.Ask children “When do you feel Mottainai?” “What does your declaration convey?”</p>	<p>Worksheets Color pen</p>

3.4 授業の実際

(1) 絵を交えて自己紹介を行った後、風呂敷の使い方やなぜ風呂敷が使われるのかといった点を、実演を交えて説明し、風呂敷には日本の「もったいない」という考え方が込められているのだということを伝えた。

(2) 「もったいない」とは普段何気なく感じている幅広い感情を言い表した言葉だと説明したうえで、いくつかのシチュエーションを描いたイラストを、もったいないという感情を喚起する場面として提示した。そして自分がもしこの場面に遭遇したらどのような感情を抱くだろうかと尋ねた。生徒からは、「悲しいと思う」といったものから「彼はもうすぐ寝る時間なのだと思う」といったものまで、幅広い意見が積極的に寄せられた。

(3) いくつかの意見を聞いた後、生徒から出た「悲しい」「残念だ」という意見を取り上げ、なぜそういった感情が湧いてくるのだろうかと問いかけ、それは「大切なものを失ってしまったこと」に対する感情なのだと説明した。さらに、なぜ大切なものを失うとそのような感情になるのだろうかと問いかけ、「あるものを大切に思うのは、人の思いや努力がそこに詰まってい

るからであり、ものを失うというのはそんな思いや努力をも失ってしまうことになるからだ」と説明し、「もったいない」はこのような考え方が込められた言葉であることを伝え、板書でまとめをした。

(4) 自分ならどんな物事をもったいないと思うだろうかと問いかけ、それをワークシートに描いてもらった。集中して描きこんでいる生徒もいる一方、何を描けばいいのか分からない様子の生徒もおり、個別に質問を受けたり指導を行った。

3.5 考察

結果的には、授業全体を振り返ってみると「うまくいかなかった」という印象が強く残る授業になってしまったように思う。その主な原因は以下の3点に集約できるのではないかと思う。

(1) 説明や発問を正確に伝えることができていなかった。「授業の実際」の(2)の場面では、生徒が抱く「感情」を引き出したかったのだが、「彼は〇〇をしている」「テーブルの上に〇〇がある」といった、絵そのものへの気付きを述べる生徒もおり、指示が明確に伝わっていなかったものと思われる。また、生徒に描いてもらったワークシートには、「もったいないと思う物事」として、「祖母にもらったネックレス」「家族」「アルバム」など、大切にしたいものを描いている生徒が多く見られた。「思いや努力の詰まった大切なもの」といった点が印象深かった、あるいは考えやすかったのであろうが、日本人の考える「もったいない」を正確に伝えることはできなかったようである。

(2) 生徒の発言を正確に聞き取れないことが多かった。生徒に意見を求めておきながら、聞き取れないことも多く、曖昧な返答しかできない場面が多々見られた。

(3) 教師からの一方的な伝達が多く、かつ抽象的な内容が中心であったため、活気のない授業になってしまった。授業展開上、教師の説明に費やす時間が多く、生徒自身が何かを作ったり、実際にやってみるといった活動も少なかった。導入部で用いた絵や風呂敷に対しては興味深そうな反応が見られたので、説明に頼らずとも、具体的な教材や活動を通じて概念を伝えられるような授業が構成できなかったらどうかという反省点が残る。

4 体験型海外教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

今回の授業実践を通じて痛感したのは、口頭での説明、文章での説明だけで伝えたいことを理解してもらうことがいかに難しいことであるか、という点である。もちろんこれは慣れない英語を用いての説明であったということもあるが、同様の事は日本人に対して授業を行う場合、さらに言えば授業に限らず物事を伝えるということ一般においても言えるのではないかと思う。

授業づくりにおいて、分かりやすい表現や説明を使いこなすことも一つの力量であると思うが、それと同様に、あるいはそれ以上に、説明に頼ることなくしていかに教育内容を身につけさせるかというのは重要な力量であるのだと感じた。説明に頼らない授業を構成するために、どのような教材を選定するか、そしてその教材をどのように用いるか。同じ内容を伝えるにしても、単に口頭で説明するよりも、具体的な事物や活動を通してそれを理解できるような授業は生徒にとって印象深く、また理解しやすいものになる場合も多いだろうと思う。

このように、同じ目標に到達させるためであっても様々な授業が構想できるのであり、その中で教材が占める位置は非常に重要なものであり、教師の力量が問われる部分であると、改め

て強く感じた。

4.2 自分自身についての変容

本研修の中で変容した、というよりは変容しなければならないと最も感じたのは、コミュニケーションやその他様々な場における積極性である。それを実感したのは、例えば ECU での授業参加、現地の学生との 1 対 1 での議論であった。他の誰にも頼ることができず、相手の英語が聞き取れない、適当な単語が見つからないなどと言ってはられない。言ってみれば逃げ場はどこにもない状況である。このような状況の中で、稚拙な英語であっても、なんとか議論をかみ合わせることができた時には、大きな充実感を感じた。

自信が無いことはできるだけ避けて通りたい。できるだけ楽なところに身を置きたい。私の中にはそのように思ってしまうがちな傾向がどこかあるように思うのだが、このような経験を通じて、できない、自信が無いなどと言って避けて通るのではなく、できないけれどやってみようという姿勢を自分はもっと持つべきだという思いが強いものになった。

4.3 グローバルマインドに関する変容

コミュニケーションを行う上で、言葉を使いこなせないというのはやはり非常に歯がゆいものであると感じた。自分の思いを正確に伝えるには、やはり言葉の力は避けがたく必要なものである。しかしその一方で、言葉が完璧に使いこなせないからといってコミュニケーションが不可能かという、もちろんそんなことはないことも実感することができた。アメリカの人々は、つたない英語であっても真剣に耳を傾け、親切に受け答えしてくれた。異なる国の人でも温かく受け入れる雰囲気を持っていたように思う。自分の考えを深いところまで正確に伝えることは難しくとも、大意を伝えることはできた。その上、相手からは想像以上に深い情報を得られることも多かった。

国と国との違いというものは大きな違いのように思いがちだが、面と向かっての人間同士の関係においてはそれほど意味のあるものではないように感じた。国の違いで不必要な線引きをせず、積極的に関わろうという姿勢こそがむしろ大切なのだという思いを強くすることができた。

5 おわりに

このたびのアメリカ滞在の中で、本研修に参加したからこそ可能であった経験をいくつもすることができた。この経験は、教育に関わる側面のみならず、今後の人生全般において重要な示唆を与えてくれるものとして、大切にしていきたいと思う。

最後に、渡航前から様々な面でご支援、ご指導をしてくださった GPSC の諸先生方、現地で私たちが快く受け入れてくださった諸先生方に、この場を借りて心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。